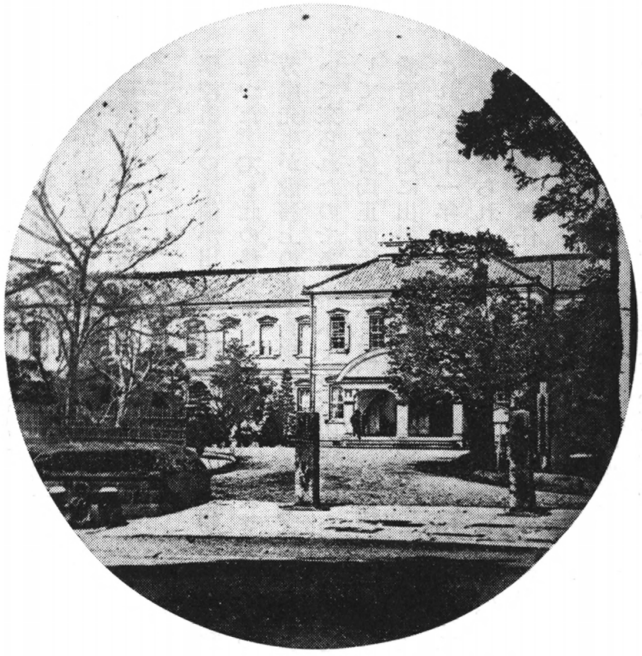

本校設立当初の校舎（関口昌孝氏所蔵写真）
右手に「東京美術學校」と記した木の仮門標が見える。

第六節　用地および校舎

東京教育博物館

本校が最初の校舎として用いた建物は上野公園内の東京教育博物館であるが、校舎および用地決定に関する文書類は現存していない。ただ、当時の新聞の中には次のように報じているものがある。

東京美術學校　同校は彌々上野公園内なる教育博物館隣地へ假に建築する事に決定せしに付、文部專門學務局長濱尾新、會計局長久保田讓、三等技師山口半六の三氏には、該地檢分として一昨日午後二時より同所へ赴きたり。

（明治二十一年七月一日『東京日日新聞』）

この記事によれば、二十一年七月の時点では東京教育博物館の隣地に校舎を新築する計画が進められていた様子である。ところが、同年八月末になると次のような記事が登場する。

東京美術學校　豫て岡倉覺三氏（文部省美術學校幹事）等の計画にて設立すべき東京美術學校ハ目下事務も概ね整頓し且つ同氏ハ京坂地方美術取調を終へ去廿五日夕歸京せしに依り猶協議の上々野教育博物館の都合次第同館を借受け開校する筈なりと

いふ。

（同年八月二十八日『東京朝日新聞』）

いかなる理由によるものか、新築計画は一転して建物借用へと変更し、遂には東京教育博物館の方が湯島へ移転することになる。この辺の経緯は『国立科学博物館百年史』（昭和五十二年同館発行）に記されているが、そこには隠微な事情があったらしく、左記の竹内久一の回顧談にもそれが窺われる。

學校組織の準備が出來て愈々上野の教育博物館の跡へ移る事になつた。尤も此の移る事もまだ秘密で發表せられなかつたが、芳崖先生が教務上の事やら秘密の事やらは、何時でも眞先に聽いて來られたのである。かゝる次第ですから、芳崖氏を始めとして、友信氏正明氏と私とが、まだ盛んに縱覽を許しつゝある教育博物館に出掛て、ひそかに敷地の檢分をやつたのである。これが二十一年の秋の事で、此時になつては會計主任には鳥羽聖敬氏が來られ、また黒川眞頼氏も來られましたが、長沼守敬氏は博物館へ轉任されました。それから愈々移轉の準備が整ふと同時に、折角今迄丹精された芳崖先生が病氣にかゝられ死去された、それが二十一年十一月四日（ママ）で歳は六十一であつて、谷中長安寺に葬られ、臥龍居士と號された、芳崖先生は唯敷地のみを見たばかりで、歿せられたのである。葬式は美術學校の教授としての資格で學校の前を通過したのである。

（「竹内教授の昔物語」『東京美術学校校友会月報』第一巻第九号。明治三十六年五月）

竹内久一らが「ひそかに敷地の検分をやった」のは、博物館との摩擦を懸念したためであろう。なお、竹内がそれを二十一年秋としているのは、前出の新聞記事が示すとおり同年八月には本校の博物館への移転が公表されていたことからみて時期的に遅すぎるようである。

上野選定

本校側は上野移転を強く望んでいた。その理由についてはのちに本校校長となった正木直彦が開校満二十五年記念式典の際に次のように述べている。

本校が位置を上野に卜したといふことに就てもまた一場の御話しがあるのであります。それは前にも申上げた濱尾男爵が本校開校以前に、圖畫取調の用務の爲に歐洲各地へ出張されたときに、伊太利へも行かれたのであつたが、或る日此伊太利羅馬の元のメヂチー家の別業の跡に設けられてある佛國美術學院へ行かれて見るに、其地は市街の中であるが、小高き處で、河に臨み林を控へといふゆうやうに（ママ）、洵に幽邃で風致のある、一頭地を抜いて居る處であつたのに男爵が感ぜられ、成るほど美術學校はかういふ處でなければならないと考へられて、歸朝後此上野の如く、高潔で茂林のある處でなければ、外に美術學校を置く所がないと思はれて、當時の教育博物館を本校としたのであるといふことであります。